

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Addisu Meseret Tadesse
論文題目	The Regulation and Utilization of Private Child Daycare Centers in Addis Ababa, Ethiopia (私立保育所の規制と利用 —エチオピア、アディスアベバを事例として—)		
(論文内容の要旨)			
<p>エチオピアの首都アディスアベバでは、この10年間で私立保育所の数が大きく増加した。その背景には、都市に暮らす親たちが依存する保育サービスの選択肢をインフォーマルからフォーマルな保育へと転換している実態がある。アディスアベバ市内には2022年11月時点で、約140の私立保育所が認可を受けて運営されていた。本論文は、このようなアディスアベバにおける認可保育所の現状とその直面する課題を、規制と利用の観点から、認可制度、保育サービスの質、子供を預ける親の年齢構成や利用の動機と経験に注目して明らかにすることを目的としている。</p> <p>第1章では、アディスアベバにおける保育所が初期の無規制状況から、不十分な規制がおこなわれた時代を経て、2016年に正式な許可証発行制度が導入され、今に至る経緯を描きだしている。このような制度の展開は、保育所に対する認識の高まりを反映しており、制度のもとでの完全な規制運用や、利用パターン、サービスの提供について検証することの重要性を浮き彫りにした。フィールドワークは、雨季と乾季の2回(2022年6月1日～8月27日、2022年11月1日～2023年1月27日)にわけて実施し、文献調査、構造化観察、非構造化観察、半構造化インタビュー、サンプル調査によってデータを収集している。保育環境評価尺度第3版(ITERS-3)を用いて、私立保育所において構造化観察もおこなった。</p> <p>第2章は関連する他地域での先行研究を参照しながら、幼児への保育サービスに関する重要な概念について論じ、親によらない保育の質を確保するための規制や原則について概説している。ガーナ、ケニア、インド、ナイジェリア、英国における、類似する認可制度の例を参考に、親以外による保育環境下において制度的に運用が可能な一般的要素について概観したうえで、第3章で検討するアディスアベバの保育所の認可規則を分析するための枠組みを提示した。施設型保育所、すなわち私立保育所のような家庭外の組織化された環境で提供される保育について、親の職業や学歴などの属性、年齢構成、保育所利用の経験や動機、健康に及ぼす影響との関連を検討した。</p> <p>第3章では、保育所の認可制度について、アディスアベバ市の食品・薬品・医療に関わる監督官庁が管理する行政資料の分析を行なっている。監督官庁職員へのインタビューや観察によって得られたデータをもとに、実際に認可されるまでの過程を分析した。認可保育所としての認定の過程と適用される認可規則について検討し、当局が</p>			

保育所の管轄を、末端の行政機関である郡庁 (*woreda*) に指定していることや、一貫性のない緩い取締りを伴う認可制度の存在が課題であることを、規制に関わる職員数の不足とともに示した。ガーナ、ケニア、インド、ナイジェリア、英国の認可制度と比較して、包摂性、子どもの発達、親による保育所への関与についてその内容のちがいを明らかにした。

第4章では、18の私立保育所に対して保育環境評価尺度第3版を用いて6つの補助尺度と33評価項目を含む質評価を実施した。その結果、総合評価に関してすべての保育所は評価尺度7段階において3以下となることを見出した。あわせて実施した非構造化観察の結果をふまえ、4つのグループに類型化してその特徴を分析した。グループAは、他と比べてすべての評価尺度において点数が高く質の高さを保っていた。グループBはAに次いでよい点数を示していたが、グループCは複数の観点において改善が必要と考えられた。グループDはすべての点において3以下の評価を受けている項目があった。

第5章は、保育所に子供をあずけている214人の親に対して、質問票を使った調査を実施し、親による保育所の評価について検討している。親が就労している場合、保育所に大きく依存する傾向が見出された。経済的な背景は多様であるが、保育所を利用する親のほとんどは、大学を卒業し専門職に就いている傾向が見出された。私立保育所の利用者は30代前半の既婚者が中心で、核家族化が進行し、育児に関して親族の協力が限られているが、育児を家政婦に頼る人びとも減少していることが見出された。親は保育所を選ぶにあたって、清潔さ、食事の与え方、住居からの近さ、安全性を優先し、これまでの経験については肯定的な評価を示した。保育所に子供をあずけることの利点としては、子どもが自分で食事をすることやテーブルマナーを学ぶこと、社会的スキルの向上、遊びの機会の増加、教育的経験などがあげられた。しかし、子どもが病気に罹る頻度の高さに対する懸念も示していた。

第6章では、アディスアベバにおいて保育所の認可制度が導入されたことが、私立保育所に対する公的な基準の適用の強化に貢献していることを指摘している。そのうえで、人材や設備などの資源が不十分で、保育サービスの需要に応えようとして基準を甘くしたために、規制制度の実効性に関する課題に直面していると結論づけた。現状の認可規則は、包摂性や保護者参加の権利を確保するといった側面において不十分であった。第5章で示したように保育所に対して親が肯定的な評価を下していたことと、子どもが必要とする多様な求めに応じて保育所を改善する必要性があることは矛盾しない。